

財団活動の沿革

1. 財団の設立—地域社会への感謝を表すために



1985年、大阪ガスは創業満80周年を迎えた。

大阪ガスと大阪ガスグループ各社は、近畿2府4県のお客様の日常生活に不可欠な都市ガスをお送りする公益事業に携わるものとして、誠実にガス事業の遂行、サービスの向上に努めるだけでなく、大阪ガスグループの成長を支えていただいた地域社会に感謝の心を表すために、従来以上の貢献をしたいと願った。

たまたま、この時期の地域社会にとって最大の課題の一つは、急速に進んでいる人口構造の高齢化であった。高齢者は多年にわたって社会の発展に尽くされた功労者であり、いつまでも健康で明るい生活を送られるよう援助することが社会の責務であると考えられる。また、大阪ガスグループにとっては、この高齢者の方々こそグループの成長を最も久しく支援していただいた方々でもある。

他方で社会の実態を見ると、現実には高齢人口の増加に対して、扶養意識の変化、核家族化の進展、産業就業構造の変化、高齢世帯の増加など高齢者を巡る環境は、ますます複雑化し困難化しており、今後も容易な解決は期待し難い状況にある。

そこで大阪ガスグループでは、創業満80周年の記念すべき年に当たり、これまで実行してきた福祉活動をより組織的、継続的に発展させ、また、来たるべき高齢社会の到来に備えて、高齢者の福祉活動を目的とした「財団法人大阪ガスグループ福祉財団」を設立して、地域社会に対する感謝の心を具体化することを決意した。

2. 財団の概要と活動内容

－健やかで明るい高齢社会構築の一助となるために

「財団法人大阪ガスグループ福祉財団」は、1985年(昭和60年)10月19日、大阪ガス(株)の創業80周年を記念して設立された。

その概要は次のとおりである。

設 立	1985年(昭和60年)10月19日 (大阪ガス(株)創業80周年記念日)
基 本 財 産	20億円
基本財産寄附者 (362社)	大阪ガス株式会社 大阪ガス関係会社 大阪ガスサービスショップ協会 大阪ガス風呂販売協力会 大阪ガス配管工事協会 大阪ガス工友会協議会
主 務 官 庁	厚生省
活 動 地 域	近畿2府4県 (京都府・大阪府・滋賀県・兵庫県・奈良県・和歌山県)

基本財産は当初5億円からスタートし、毎年5億円ずつ積み上げて昭和62年に目標の15億円となった。平成元年には、さらに5億円増額し20億円となり、現在に至っている。

財団の設立目的は、高齢者のための「福祉に関する諸活動を助成」し、また「自ら活動を行い」、これを通じてわが国の高齢者の社会福祉に寄与しようとするものであるが(「寄付行為」による)、具体的には、次の三つである。

- (1) 高齢者のための「地域福祉活動など」の助成
- (2) 高齢者のための「福祉の向上および健康の維持・増進に関する研究・調査」の助成
- (3) 高齢者のための「健康の維持・増進に関する事業」の財団自身による実施

これは、事業の性格から見て『助成事業』と『健康づくり事業』の二つにまとめることができよう。

3. 財団活動の展開—創設から定着、拡充へ



▲ 理事会



▲ 選考委員

[創設期]

創設の頃（昭和60年）は、いわば徹底的なPRの時期でもあった。

『助成事業』については、財団サイドに福祉分野の専門情報や経験がなかったこともあって、当初からいわゆる一般公募を避けて、2府4県と3政令都市（京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県、京都市、大阪市、神戸市）の社会福祉協議会に理解と協力を求めた。

その結果、助成の募集も上記の「社会福祉協議会の推薦を得たものの中から」財団事務局の検討を経て、選考委員会で最終決定するというルートが固まった。これは大変有り難いことであり、その後の福祉助成の順調な展開の基礎となった。

ちなみに、初年度（昭和60年度）の福祉助成は、助成予定額2,300万円に対して、90件・4,740万円と2倍を越す応募があり、財団の一同は社会福祉協議会に改めて感謝した。

なお、研究・調査助成金は、財団設立の翌年、昭和61年度から新たに創設した。

『健康づくり事業』は、初年度は健康教室とヨガ、太極拳、ボディートーク、真向法といった種目を特定し、受講される高齢者の方が集まりやすいように、当初から講師と共に「住居地に出向いて開催するという基本方針」を設定した。

また、開催に当たっては各地の老人クラブ連合会との共催の形で進めることとし、PRに専念した。PRの過程で、大阪ガスがガス器具の販売とセットで

営業活動をしようとしているのではないかと警戒されるケースも間々あり、関係者を困惑させた。初年度には、辛うじて健康教室は8回、280名の参加があったが、これとは別にPRを目的として、中ノ島中央公会堂で大阪市老人クラブ連合会と連携して市老連の会長、副会長、保健体育部長を集めて1,000人の研修会を開催して、健康づくりの啓発活動も行った。その他、大阪ガスの健康開発センターの力を借りて、大阪市老連の幹部のメディカルチェックを行ったことも特筆に値しよう。

【定着期】（昭和61年度～平成元年度）

財団活動を全般的に見ると、立ち上がりの段階でPRを精力的に行った結果、知名度が向上したことで、活動目的が社会的なニーズに適合していたことが相俟って、第2年度からそれぞれの事業を計画どおり円滑に進めることができた。

昭和61年度から平成元年度にかけて、各事業とも概ね地域に定着した時期と見ることができる。

『助成事業』のうち「高齢者福祉助成」については公募金額は3,000万円（昭和61年度のみ3,600万円）としたが、平均的に1.5倍程度（金額比）の応募が続いた。



▲ 福祉活動助成—配食巡回用車両
(豊岡市)

「研究・調査助成」については昭和61年度に創設し、初年度は1,000万円、次年度から平成元年にかけては毎年1,500万円として、近畿2府4県の大学、医療機関などに直接公募を行った。これに対する要望は予想以上に強く、件数については、ほぼ2倍、金額については平均2.7倍程度の応募が安定的に続いた。

助成内容は、

- ①地域の高齢者に対する給食サービス用厨房機器の購入費、
- ②配食や訪問サービス用車両の購入費などが最も多く、
- ③高齢者施設のデイサービス用ストレッチャーなどの介助労力の軽減のための援助要請が多かった。
- ④研究・調査の対象となった研究テーマは多岐にわたっていて特徴が挙げ難いが、福祉の向上分野では「地域のケアに関するネットワーク作り」を対

象にしたものが特に多く、時代の要請と考えられる。また、健康の維持・向上分野では「運動の効果」「骨粗鬆症」「痴呆」「食生活と栄養」の研究が多かった。



▲ 福祉活動助成（藤井寺市）

『健康づくり事業』

健康づくり事業は、初年度のPR活動の効果もあって、創設の翌年から平成2年度にかけて年間

100回を越す開催回数、9,000人程度の参加者によって事業をすすめることができた。実施種目のうち、「健康づくり料理講習と体操」「医師による健康講話と体操」「ゲートボール大会」、目新しい種目である「ボディートーク」が健康づくり事業の定着に大きく寄与した。

当財団では、健康づくり事業が独り善がりにならないように各講習会の後でアンケートをとったり、座談会を行ったりして、参加者の意見を聴くように努めてきた。

その中で特に目立つものとしては、「良い先生によって新しい健康法が習えて良かった」「とても楽しく習得できた」と、歓迎の意向が窺えると共に、「近いところで開催してもらったので参加しやすい」という意見が多く、健康のつどいを現地に出向いて開いてきたことが事業の推進に大きく貢献していることが分かる。

この間のイベントとして特記すべきものとしては、昭和61年10月に開催し



▲ すずらん杯 ゲートボール大会（今津決勝大会）

た「健康シンポジウム」である。
その内容は次のとおりである。

◎特別講演 脳内出血の闘病体験
「生きるなり」俳 優 千 秋 実 氏

◎シンポジウム 「長寿社会をすこやかに生きる」

司 会 井 関 敏 之 先生 [大阪体育大学 教授]

講 師

- ・ 120歳への招待 磯 典 理 先生
[大手前女子大学 教授・大阪大学医学部老年科 講師]
- ・ 明日への健康をつくる食事指針 野々村 瑞穂 先生
[大阪府栄養士会 理事]
- ・ 高齢者の運動のすすめ 小 林 寛 道 先生
[東京大学教養学部 助教授]

これは、参加者にとって感銘深く、示唆に富んだ内容であったが、財団にとっても当初設定した活動指針に、ある種の確信を与えるシンポジウムであった。

[拡充期] (平成2年度～平成4年度)

基本財産の運用益(金利)が活動原資となる財団運営は、世上の景気そのものよりも寧ろ、そのベースとなる政府の金融政策の影響を受ける。平成2年度以降、いわゆるバブル経済の引き締めのために公定歩合が引き上げられたことによって預金金利が上昇し、財団の収入は急速に増加した。ちなみに、預金利率(年平均)を見てみると、平成元年度は4.85%であったものが、平成2年度には6.60%になり、翌年の平成3年度には7%を上回るころまで上昇した。財団としては、この機に収支のバランスを慎重に見極めながらも事業の拡充へと施策を展開していった。



▲ 福祉活動助成—大型液晶ビジョン (守山市)

まず『助成事業』については、助成金に対する応募の状況からみて、平成2年度以降、助成金総額を従来の4,500万円（福祉助成金3,000万円、研究・調査助成金1,500万円）から5,500万円（福祉助成金3,500万円、研究・調査助成金2,000万円）に増額した。同時に、研究・調査助成金の1件当たり助成額も上限を100万円から200万円へと増額した。



▲ ボランティア助成
(京都市)

それでも、なお助成金に対する応募率は高く、福祉助成金が2府4県3政令都市の各福祉協議会において一次の絞り込みがなされていても2倍となり、研究・調査助成金は研究者から財団への直接申し込みであるために3倍を上回る状況であった。

この期間の高齢者福祉活動の助成内容は、従来の傾向に変化はなく、1位が厨房設備機器で圧倒的に多く、2位が訪問、デイサービス用の送迎車両、3位以下は年度によって違いがあり特定できないが、視聴覚の機器や介護用機器(車椅子など)、高齢者に対するコミュニケーション促進のための活動費用などが多い。

研究・調査研究のテーマは、これも従来と同じく多岐にわたっていて特徴をまとめにくいですが、従来見られなかった研究テーマも寄せられるようになった。

- 地域社会における援助のあり方
- 高齢者向けの住居のあり方
- 老人のターミナルライフのあり方
- 高齢者用公共施設の色彩計画
- 高齢者の自立阻害要因
- 運動療法と血流の関連
- 脳幹排尿中枢の加齢変化
- 都市および農村に居住する老人のライフスタイルとメンタルヘルスの関連
- 記憶障害と栄養の関連
- 肥満と骨密度の関連
- 運動療法と骨粗鬆症の進行防止

などは、専門家以外の人にとっても興味を引くテーマであろうか。

『健康づくり事業』については、平成2年度は例年と大差なかったが、平成3年度から、同一場所で同一種目を3回ないし5回連続して実施する「シリーズ健康教室」を創設したこともあって、年間の開催回数が一挙に5割増加し、参加人員も2割増加した。



▲ 演歌ビクス（姫路市）

特に、演歌のリズムに合わせて体操を行う「演歌ビクス」は、目新しさも手伝ってマスコミにも取り上げられ、参加者の評判は次第に高くなった。また、高齢者向きの穏やかなヨー



▲ 演歌ビクス（堺市）

ガの体操も安定した人気を博し、シリーズ健康教室の代表的な種目となった。

当財団の健康づくり事業が、ユニークな活動として世間の注目を得るようになったのはこの頃である。

この時期の健康づくり事業の特徴の一つは、比較的参加人員の多い健康講話やウォーキング大会、そして講演会などに特に力を注いだことである。

「ガス健康教室」として親しまれてきた5回シリーズ(月1回5ヶ月にわたって行う)の健康講話は、第一線大病院の著名な医師や大学病院の助教授、講師の先生方によって専門的な内容を具体的に話していただいていたために人気は逐年上昇した。そのため応募者の要望に応え、会場を府立体育会館の会議室(100名収容)から鞆公園の大阪科学技術センター(300名収容)へ移して実施するという状況であった。

「ウォーキング大会」も当初の予想を上回る人気イベントとなった。長居球技場で正しい歩き方を学んだ後、歩数計を使って同公園の遊歩道(約3km)



▲ ガス健康教室（科学技術センター）

を歩くことは、高齢者にとって老化を防止する契機となり、また年一度の出会いや再会の節目になるようである。800名程度の募集に対して1,000名を優に越す応募があった。

なお、このウォーキング大会は、京都でも鴨川の河川敷を利用して原則として毎年実施してきた。

「講演会」は、財団の行う秋のメインイベントである。平成2年11月に「設立5周年記念講演会」を朝日生命ホールに於いて開催した。

講師は、財団理事でもある大阪労災病院長の阿部裕先生とエッセイストの海老名香葉子さんにお願いした。『長寿社会を明るく、

楽しく、いきいきと』を共通のテーマとして、演題は、「あなたは健康ですか」(阿部先生)、「泣いて、笑って、頑張って」(海老名さん)であった。会場一杯の来場者から沢山のお礼の言葉をいただき、有意義な5周年記念行事となった。

好評にこたえて、「講演会」を平成2年以降、毎年、恒例として朝日生命ホールにおいて行ってきたが、各年の講師とその内容は以下のとおりである。



▲ ウォーキング大会
(鴨川河川敷)

◇平成3年度は、NHK大河ドラマの脚本家として著名なジェームス・三木氏に「ドラマと人間」、また、当財団の健康教室の講師でもある大阪市立大学名誉教授の中川敬先生に「腰痛予防作戦」についてお話をいただいた。

◇平成4年度は、ラジオ、テレビでお馴染みの話芸家・江戸家猫八氏に「うそと誠」、また、当財団の健康教室の講師であり西日本屈指のヨーガ指導者・かしいけいこさんに「ヨーガの心と実技」について出演をお願いした。



▲ ガス健康教室



▲ ウォーキング大会
(長居公園)

◇平成5年度は、マスコミを代表するパーソナリティー・浜村淳氏に「明日の幸福」についてお話を、また、当財団の協力グループでもあるリズム体操研究会の皆さんに健康的で美しい舞台実演を行っていただいた。



▲講演会
—タオル体操—

◇平成6年度は、新聞紙上でも心の悩み相談にユーモアを交えながら回答を記載しておられる、大阪府中央子ども家庭センターの頼藤和寛先生に「高齢者の暮らしと心の悩み」について講演を依頼した。また、新しい試みとして「懐かしい心の歌・故郷の歌—独唱・トークそして皆んなで歌を」と題して、奈良市音声館館長で、わらべうたの保存、普及に努力されている荒井敦子さんに出演をお願いした。

◇平成7年度は、阪神大震災の後、マスコミなどを通じて被災者を励ましてこられた、川柳作家の時実新子さんに講演「自分を生きる」をお願いした。また、前年度、音楽のステージが好評であったことから、我が国の代表的なクラリネット奏者の北村英治氏に「クラリネットと私」と題してトークと演奏をお願いした。

「講演会」も当財団の人気イベントとして定着してきたが、参加されたお客様から『大阪ガス・福祉財団の講演会は、講師が親しめる方だし、内容が心に残るので毎年楽しみにしている。』とお褒めをいただいている。

当財団が、従来からの活動から一歩踏み出したのもこの時期である。高齢者の福祉向上



▲講演会
—クラリネットと私—



▲ 体操フェスティバル
(府立体育館)

を取り入れた他団体の催しに対して、後援あるいは共催のかたちで参画し、少しでもお役に立ちたいと考えた。

その一つは「体操フェスティバル大阪国際大会」である。

これは、地元、大阪の女性による「リズム体操研究会」の皆さんが、長い研鑽を経て、毎年6,000名を越す老若男女(60チーム)の体操愛好家に海外の体操グループを加えて行う一大イベントである。競技形式でなく、美しくリズムカルな体操の集いは、明るい元気な**長寿社会**を指向する当財団の目的に合致しており、声援を送ることとした。

今一つは「高齢者福祉専門家国際交流」である。

これは、国内の高齢者福祉を志す有力法人と共に厚生省の助力を得て、いわゆる福祉先進国から専門家を招き情報の交換を行うものである。過去4年間、スウェーデン、フランス、英国、ドイツの行政官、実務家を招いて交流を深めてきた。

こういった試みは財団の活動を活性化する面もあり、今後も可能な範囲で続けたいと考えている。



▲ 高齢者福祉専門家国際交流

4. 財団活動の苦悩—長引く不況と阪神大震災

(1) 財団の運営源資は、言うまでもなく基本財産の運用益である。

しかも、財団の場合は、基本財産の運用に当たって安全性が特に要求されることから、当財団では当初から有力銀行の金銭信託と貸付信託に預託し、その金利を運用して活動を展開してきた。

日本の経済が、1986年(昭和61年)末から1991年(平成3年)初頭にかけて平成景気と呼ばれる異常なまでの好況の後に、いわゆるバブルの崩壊を招来したことによって、財団の財政事情も一挙に苦しい状況に追い込まれた。

平成3年度には、年間の平均金利が7%を越す高利率であったが、平成4年度の金利調整局面に入ると利率が下がり始め、平成5年度には金利の下げ回数が、実に年間10回に及んだ。それにも拘わらず、世に言う「複合不況」の根は深く景気好転の兆しは見られず、金利は平成6年度、7年度と下がり続け、ついに平成7年7月、金銭信託は0.88%、貸付信託の利率が1%と過去に例のない最低水準にまで下落した。

これに対して『助成事業』では、特に助成金の枠を縮減することとし、平成5年度には福祉助成金を500万円減額して総額5,000万円とし(平成4年度：5,500万円)、翌平成6年度には更に1,200万円縮小して助成金総額を3,700万円とした。ちなみに、平成8年度予算では更に大幅な減額が必要となり、総枠を2,000万円とせざるを得なくなった。

『健康事業』は当財団の固有な活動でもあることから、実施規模(実施回数や参加人員)は原則として縮小せず、関連経費の節減に努めることとした。多人数の申し込みによって開催するガス健康教室やウォーキング大会などで、申込を往復はがきに切り替えたのはこの時期である。タオル体操などに使用するタオルも木綿のいわゆる日本手拭に変更した。また、料理講習では、材料費の一部を負担していただくこととした。

『一般管理費』も可能な限り削減した。

(2) 地域と共に歩む当財団活動にとっても、平成7年1月17日に発生した「阪神大震災」の衝撃は大きかった。

『助成事業』においては、既に選考委員会において決定していた「福祉助成金」の内容を被災地の救援活動の一助になるようにと大幅に変更した。神戸市、兵庫県に対して当初予算額の3倍(1,805万円)の助成金を贈ることとし、併せて「研究・調査助成金」については大震災に関連した2件のテーマを設定し、これに対してのみ助成を行うこととした。

助成対象となった研究テーマは次のとおりである。

1. 「高齢者及び障害者の災害時、緊急時の危険度の評価とその回避対策の研究」(助成金 200 万円)

神戸大学 医学部 保健学科 石川雄一教授 (グループ研究)

2. 「高齢者の健康維持における体液量調節の重要性－緊急時経口補液の有効性の検討」(助成金 100 万円)

京都府立医科大学 能勢 博 助教授 (現在、信州大学教授)

『健康づくり事業』

健康づくり事業についても大震災の影響は大きかった。震災の発生により、京阪神間で予定されていた事業は当然ながら中止となった。

しかし、幸いにも震災の影響の小さかった地域から「健康のつどい」を予定どおり実施してほしい旨の催促があり、勇気づけられるものがあった。結局、年間の実施状況は、例年より若干下回る程度で終結し、参加者総数は10,530名となった。

「阪神大震災」の影響は、平成7年度の後半になると順次薄れ、全体としては例年並のペースに回復してきた。

- (3) 平成7年度(4月1日～平成8年3月31日)の最終実績は、「阪神大震災」の影響下にありながらも、概ね計画どおりの内容となった。

具体的には、『助成事業』では、公募金額3,700万円に対して3.7倍の応募があり、『健康づくり事業』では、各種の健康教室の開催要請がコンスタントに寄せられ、年間の開催回数150回、参加者数は12,000名に達した。

しかし、これに呼応すべき財務状況は、金利の極端な低下により悪化の一途

をたどり窮状に陥った。この状態は単に当財団だけではなく、国内の殆ど全ての財団に共通するものであり、まさに、存亡の危機に瀕しているといえよう。

幸い当財団では、平成7年度については前期の繰越金をもって収入の不足分を充当できたが、平成8年度については予算の立案が不可能な状況となったので、これに対処するために大阪ガス(株)より援助を仰ぐこととなり、平成8年2月末に寄付金を受領した。

当財団としては、この機会に活動内容を整理し、『助成事業』では地域福祉の向上に尽力されるボランティア活動を重点的に助成することとし、『健康づくり事業』では「寝たきり」の予防により一層役立つように計画を策定し、実施することを決意した。

以上



十年の歩み

1996



1.1996～2005年度(平成8～17年度)

厳しい基本財産の運用を乗り越え、安定した事業運営へ

基本財産の運用は、かなり厳しい期間となり、これまでの貸付信託(変動金利)から大口定期預金(固定金利)への預け替え、さらには各種債券への運用替えを進めることで、運用利率の維持・向上に努めた。

大阪ガス株式会社、大阪ガス風呂販売協力会様、大阪ガスサービスショップ協会様、大阪ガスメンテサービス会社懇話会様およびOSS親睦会様他から運用財産の寄附を受けることで安定した事業運営を行った。

また1999年度に個人の方から受領した寄附金2億円を基本財産に組み込んだ。

助成事業

■ 予算調整で助成件数の維持に努める

高齢者福祉助成では、予算が厳しい中、1件当たりの限度額を徐々に引き下げることで、助成決定件数を維持した。

当財団としては、公的助成を受ける事業には助成を行わないこととし福祉施設への助成を行わず、助成対象をボランティア活動にシフトした。また阪神・淡路大震災復興につながる申し込みは優先的に評価し、金額充足度を高めた。(1996年度)

さらに、新しく誕生したNPO法人からの応募も見られるようになった。(1999年度)

調査・研究助成では、「福祉の向上」と「健康の維持・増進」の2分野で募集を行った。

初めて2年助成を募集した。(1999年度)

従来部門に加え特定部門として「転倒防止」をテーマに募集した。(2005年度)

助成金額の累計が5億円に達した。(1996年度)

健康事業

■ 認知度の上昇により、累計参加人数が10万人を突破

健康事業は、1995年度に累計参加人数が10万人を突破したところであり、認知度が一層高まりを見せ、参加人数が15,000人を超える年度も多かった。ウォーキング大会も実施した。

■ 年代に適応したプログラムの選定

「健康のつどい」では、プログラムとして「元気ワクワク健康教室」と「生命(いのち)の貯蓄体操」を採用した。(1998年度)

また、「太極拳」と「ヨーガ」を種目から外し「ふれあい料理教室」と「笑い体操」を新種目として追加した。(2005年度)

講演会も以下の通り開催した。

1996年度

作家 難波利三氏による講演「人間ばんざい」

中国古箏奏者 伍芳氏の演奏「悠久の調べ」

1997年度

神戸大学教授 倉光弘己氏による講演「高齢社会と生き方」

琉球舞踊玉城流 金城康子氏一門による「紅型が奏でる歌と踊り」

1998年度

服飾研究家 市田ひろみ氏による講演「人生ってすばらしい」

ボーカルグループ ハミングバードによる童謡と唱歌のコンサート



生命の貯蓄体操



ウォーキング大会

さらに、2000年度までは、大阪市等の老人クラブ連合会主催の「健康づくり推進大会」や、体操リーダー連絡協議会主催の「体操フェスティバルOSAKA国際大会」、すずらん杯ゲートボール大会などに後援・協賛を行ったが、2001年度以降に廃止した。また、2000年度から歴史ウォーキング、歴史講座等が開催された。これは、2007年度以降10年間にわたり継続実施されることになった。

新法人としてのスタートへ、遺漏なき運営に努める

内閣府より公益法人への移行認定を得て、2010年10月1日(登記日)に公益財団法人に移行した。法の定めにより、2010年度は4月1日～9月30日を旧法人として、10月1日～2011年3月31日を新法人として、それぞれ決算を行うこととなり、旧法人の決算承認および新法人スタートの体制等の整備のため、新法人としての第1回理事会および第1回評議員会を開催した。第1回理事会および評議員会では、公益財団法人として適正な業務の執行体制の整備を図るため、10件の規程類の整備を行うとともに、改めて新法の規定等の確認を行うとともに、「基本財産の指定」「助成選考委員の選任」「事務局長の任命」を行うなど、遺漏のない運営に努めた。

また、低金利下において収入の減少が顕著となっており、財団の活動規模を維持するため、一般からの寄附金を募るべく「寄附金取扱い規程」を定め、寄附金の取扱いの適正化を図った。(2011年度)これ以降、個人の方からの寄附金が多数寄せられるようになった。

さらに、金融状況の不透明さに鑑み、財団事務局による財産の運用および管理には限界があるため、財産運用管理委員会を設置し、財産の管理および運用の適正化を図った。(2011年度)

助成事業

■ 特別部門の募集を実施

助成事業では、それぞれ特別部門(従来部門とは別予算)を設定して募集を行った。

高齢者福祉助成では、

「アクティブシニア応援助成」(2006年度) ※兵庫県社会福祉協議会様のご協力

調査・研究助成では、

「高齢社会における地域福祉力」(2006年度、2007年度)

「足・腰の老化と予防」(2008年度)

また、調査・研究助成では、従来部門に加えて、「分野横断的課題」部門(2009年度)、「福祉現場の創意工夫」部門(2014年度)を新設した。

健康事業

■ 累計参加人数が40万人を突破

健康事業では、累計の開催回数が5,000回を突破(2014年度)し、累計の参加人数が40万人を突破(2016年度)した。

「健康のつどい」では、「自然観察」を新たに試行(2006年度)し、次年度に正式採用した。さらに、財団オリジナルの健康タオルを使った「健康タオル体操」を暫定的にスタートさせた。(2010年度)なお、2009年度には新型インフルエンザの影響で事業を一部中止し、2010年度には収入の減少に伴い「健康のつどい」の開催回数を圧縮するなどの対応も行った。

■ 特別企画で事業促進へ

2015年度の「健康づくり教室」では、「笑いで長生きと認知症予防-笑いほどよく効く薬はない-」と題し、和歌山県立医科大学 廣西先生の講演とともに、特別企画として桂三金氏の落語が上演された。

以下の講演会も開催した。

2007年度、2008年度

天満天神繁昌亭における落語公演「ガス 笑いと健康」



寄附金を活用し、安定した財団運営の継続へ

低金利による基本財産運用益の減少の下、財団運営の効率化を進めて支出を削減するとともに、奥村組土木興業様、OG親睦会「奈良の会」様、すずらん会会員様他の個人の方々および大阪ガス株式会社から寄附金を受領し運用財産として活用することで、安定した財団運営を継続した。

また2018年度には、個人の方から受領した寄附金1億円を基本財産に組み込んだ。

ただ、2022年度からの事業収益が大幅に低下する見込みとなったことから、適正な事業運営を継続することが困難な見込みとなり、基本財産の取り崩しを含む来期からの中期計画を検討・策定し、3月の定例理事会にて審議決定した。

(2021年度)

基本財産の取り崩しは1億円(2022～2026年度:5か年)とし、特定費用準備資金の積み立てを実施した。(2022年度)

■ コロナ禍での事業遂行への不安、 細心の注意を払った従来通りの事業推進に注力

2020年初頭に発生した新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年度以降の事業は従来通り遂行することが難しく、理事会・評議員会・助成選考委員会をオンライン会議方式も活用して審議を実施した。2023年度に新型コロナウイルスが5類に移行したことで、それ以降はリスク回避に細心の注意を払いながらも、従来通りの事業推進に戻りつつあるところである。

なお、基本財産の運用に関しては、2017年度に「財産運用及び管理規程」を見直して運用対象に「日本株式」を加え、2020年度に初めて大阪ガス株式会社の株式を購入した。

助成事業

■ 低金利の影響で助成限度額が減少

助成事業では、低金利による基本財産運用益が低下することに伴い、徐々に助成予算額および1件当たりの助成限度額の低下を余儀なくされた。

健康事業

■ 新型コロナウイルス感染拡大、各事業に求められる創意工夫

健康事業では、2020年3月から新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、各事業の開催中止が相次いだ。

高齢者の健康の増進を図る健康事業は、新型コロナウイルス感染流行の影響を大きく受け、主催者からの申し込みにより居住地まで出向いて実施する「健康のつどい」は、2020年度第一四半期はすべて中止になった。(年間トータルで51回中止)その結果、開催回数、参加者数は大幅に減少したが、感染者数が減少した期間には、希望する主催者側と協議して参加人数の制限を行い、感染防止対策をしっかりと講じたうえで実施した。当財団が主催者となる「健康づくり料理講習」「健康づくり教室」は、リスク回避の観点からすべて中止した。

その代替手段として「健康づくり教室」の講演予定内容をビデオ制作して当財団のホームページより配信を行うとともに、過去参加者580人にテキスト冊子とビデオ視聴のご案内を送付した。



2020年「健康づくり教室」動画

■ 感染流行の影響で、事業活動も変化

2021年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染流行の影響を大きく受けた。

「健康のつどい」は、年間トータルで29回中止となり、その結果、開催回数、参加者数は大幅に減少したが、感染者数が減少した期間には、希望する主催者側と協議して参加人数の制限を行い、感染防止対策をしっかりと講じたうえで実施した。当財団が主催者となる「健康づくり料理講習」「健康づくり教室」の各事業は、リスク回避の観点からすべて中止した。

しかし、「健康づくり教室」は遠隔地でも講演予定内容を視聴できるように、昨年度開始したビデオ制作・配信を継続して行った。財団のホームページもリニューアルし、社会福祉協議会様等とも連携して動画利用促進の周知を行った。

2022年度には、新型コロナウイルス流行の影響を受けたが、その影響は軽微となった。年間100回実施の計画であった「健康のつどい」は6回が中止、「健康づくり教室」は3回実施の計画のうち大阪会場の1回が中止となった。2020年度より開始した「健康づくり教室」のビデオ制作・配信を2022年度も実施し、動画利用促進の周知を行った。



2024年「健康づくり教室」動画

■ コロナ禍の動画利用拡大により、1.4万回を超える総視聴数を獲得

2024年度には、受け入れ先との調整や座席の間隔を広くとるなど、引き続きインフルエンザやコロナウイルス感染防止に配慮して各活動を実施した。「健康づくり教室」における講演のビデオ制作・配信も引き続き行い、当財団の広報活動の一環として動画利用促進・周知を行った結果、2024年度配信分総数で1.4万回を超える視聴数を獲得した。



■ より健康を意識したプログラムへリニューアル

「健康のつどい」では、2017年度に「食と話と体操」のメニューをほぼ全面的に入れ替えて刷新した。(骨・筋肉の強化、血管若返り、認知障害対策等) また2022年度に「骨盤ストレッチ」を新たに試行し、次年度に正式採用した。

さらに、1993年度から実施していた「演歌ビクス・うたビクス」については、講師陣の変更に伴いプログラムを刷新し、2022年度から「流行り(はやり)歌ビクス」として全面リニューアルした。

2017年度、通常の「健康づくり料理講習」に特別企画として桂三金氏の落語が上演され、食と笑いのコラボによる健康の維持・増進を図った。



骨盤ストレッチ



流行り歌ビクス

財団設立40周年を迎え、堅実な支援・運営を目指す

債券の低利回りが続く中、基本財産を取り崩して積み立てた特定費用準備資金から、公益財団法人に相応しい事業活動費用に充当することで、引き続き高齢者福祉に寄与できる堅実な財団運営を目指すこととした。

なお、2025年度には、大阪ガス株式会社が創業120周年を迎えるにあたり寄附金を受領することとなったため、財団設立40周年記念事業(後述)費用に充当する計画である。

助成事業

■ 各地域との連携強化、 より多くの支援を目指し認知度向上に取り組む

高齢者福祉助成では、申請団体との窓口を担っていただいている府県・政令指定都市の社会福祉協議会様との連携を強化するとともに、「健康のつどい」や「健康づくり教室」等において助成事業の告知ビラを配布するなど、幅広い周知を図り、より多くの団体からの申請を受けるよう引き続き取り組んでいく。

また、調査・研究助成については、ここ数年「健康の維持・増進」に関する応募が多く、福祉系の応募が少ない傾向がみられるため、高齢者の福祉の向上と健康の増進という、当財団の助成の趣旨に鑑み、福祉現場での実践に注目した応募の促進に努める。

健康事業

■ コロナ禍を乗り越え、迎えた40周年記念

健康事業では、高齢者の健康の維持・増進のため、引き続き公益性・公平性・透明性を確保しながら、より効果的で魅力ある事業活動を行う。

そのため、「健康のつどい」ならびに「健康づくり料理講習」、「健康づくり教室」のイベントを着実に継続して行う。

「健康のつどい」については、引き続き1団体当たりの年間利用数を1回に制限するとともに、コロナ禍から続くソーシャルディスタンスの実情に合わせ、1回当たりの参加人数を50人から35人とし、新規開拓も行いつつ継続して実施する。

「健康づくり料理講習」は若干回数を増やしコロナ禍前の計画であった計10回の開催を予定する。

「健康づくり教室」は、大阪開催分を2回、京都、神戸と合わせ計4回の開催を予定し、京都、神戸は40周年記念事業と位置づけ、従来の講話と体操に特別企画を加え実施する。またコロナ禍より開始した「健康づくり教室」の内容をコンパクトにまとめた健康講話の動画配信を継続して実施する。

さらに40周年記念イベントとして、これまでの感謝とともに当財団の活動を関係者に広く知っていただくことを目的に、参加型行事と講演会からなるイベントを開催する。



設立40周年記念事業計画

1. 事業の概要

1985年10月19日、大阪ガス株式会社（以下、大阪ガス）の創業80周年事業の一つとして財団法人 大阪ガスグループ福祉財団（以下、福祉財団）が創設された。2008年の新法施行に伴い、2010年公益財団法人へ移行し、現在に至っている。

2025年は財団設立40周年であるとともに公益法人化15周年を迎える記念の年となる。

これまでの活動の棚卸とともに新たな時代に向けた福祉財団の姿を広く知っていただくことを目的とした周年記念事業を行う。

2. 事業の内容

(1) 40周年誌の編纂

目的

福祉財団が2025年に設立40周年を迎えるにあたり、これまでの活動を記録し、振り返る機会とするとともに、当財団の活動を関係者に広く知っていただくことを目的とする。

内容

「これまでの歩みとこれからへの第一歩」

設立趣旨、沿革/活動内容と活動成果/助成事業/健康事業/座談会/役員任期等資料

上記に加え、健康レシピや健康ポーズなどの長寿生活実現のためのTipsを掲載する。(HPにも掲載予定)

(2) 記念イベントの実施

目的

これまでの感謝とともに当財団の活動を多くの方々に広く知っていただくことを目的とする。

当財団が掲げる「明るく・楽しく・いきいきと!!」の実現を目指し、参加いただいた高齢者の方々が半日のイベントを通じて、楽しい思い出を心に刻み、笑顔になって帰路に就いていただくことを目標とする。

内容

これまで外出の機会を創出し、健康に関する知識を提供することを目的に行ってきた「健康づくり教室」をベースに、参加型行事と講演会からなる40周年特別プログラムを開催する。高齢者の行動範囲に制限があることも考慮し、大阪、京都、神戸の3か所で開催。

「つながり」が深まる場の提供

高齢者や友人・知人を連れてくることで、世代や地域の壁を越えて「つながり」を深める場を提供します。このイベントをきっかけに、参加者同士が新しいコミュニティを形成し、次回以降のイベント参加や地域活動への関心を高めてもらうことを目指します。

健康を楽しむライフスタイルの提案

単なる健康情報の提供ではなく、「楽しく健康を維持する」ことを中心に据え、歳を重ねることへのポジティブなイメージを醸成し、「今後の人生の楽しみ方」を示すような内容を講演やイベントに活かします。

POINT

40周年
記念イベント

財団の役割と認知拡大

財団の活動や助成制度をより広く知ってもらうため、財団の支援や健康イベントがどのように役立つかを紹介する場を設けます。これまで財団の存在や活動を知らなかった層にもアプローチします。

一体感を感じられるプログラム設計

イベントを通じて参加者が「次も参加したい」「他の人にも伝えたい」と感じる内容を目指して、参加者全員が一体となって楽しめるようなプログラムを企画します。

スナップ写真で振り返る

健康事業 40年のあゆみ

「十年の歩み1996」より

設立～10年 1986-1995





料理教室(大阪ガスッキングスクール京都)



シリーズ健康教室(大阪科学技術センター)



講演会—みんなで歌を—(朝日生命ホール)



ヨーガ(大阪市中央保健所)



太極拳(尼崎市)



真向法(堺市浜寺)



シリーズ健康教室(大阪科学技術センター)



食の話(東大阪市高井田)

健康事業40年のあゆみ

設立11～20年

1996-2005



ウォーキング大会(1999年9月 大阪市東住吉区)



食の話と体操(2001年10月 尼崎市)



うたピクス(2002年7月 大阪市平野区)



ウォーキング大会(2002年10月 大阪市東住吉区)



真向法(2000年7月 大阪市西成区)



健康づくり料理講習(1998年7月 京都市下京区)



健康講話と体操(2000年11月 加古川市)



元気ワクワク健康教室(2001年12月 草津市)



生命の貯蓄体操(2004年3月 堺市)



うたピクス(2005年1月 大阪市東淀川区)



うた広場(2004年11月 松原市)



うた広場(2004年6月 大阪市生野区)



ボクサートーク(2004年11月 堺市)



ヨーガ(2004年7月 加古郡稲美町)



健康づくり教室(2004年7月 大阪市西区)



健康づくり教室(2004年9月 大阪市西区)



健康リズム体操(2005年1月 大阪市西区)



健康講話と体操(2004年5月 明石市)



生命の貯蓄体操(2004年10月 大阪市都島区)

健康事業40年のあゆみ

設立21～30年

2006-2015



健康講話と体操(2008年10月 橋本市)



食の話と体操(2011年4月 生駒郡三郷町)



元気ワクワク健康教室(2009年7月 大阪市住吉区)



うた広場(2009年6月 守口市)



うた広場(2009年6月 守口市)



笑い与健康体操
(2014年2月 京都市西京区)



ウォーキング大会(2013年11月 京都市)



ウォーキング大会(2014年10月 大阪市中央区)



ウォーキング大会
(2012年10月 大阪市中央区)



ウォーキング大会
(2012年10月 大阪市中央区)



健康づくり料理講習
(2014年4月 大阪市中央区)



うたピクス(2009年6月 神戸市須磨区)



うたピクス(2009年6月 八尾市)



健康づくり教室(2012年6月 大阪市西区)



うた広場(2006年3月 茨木市)



健康づくり教室(2014年6月 大阪市西区)



健康リズム体操(2009年7月 京都市伏見区)



健康講話と体操(2006年1月 大阪市東淀川区)



健康講話と体操(2009年7月 守口市)



自然観察教室(2008年11月 京都市上京区)



笑い体操(2006年6月 岸和田市)



歴史講座(2007年11月 大阪市西区)



歴史講座(2014年11月 大阪市西区)

健康事業40年のあゆみ

設立31～40年

2016-2025





設立40年～

現在大阪ガスグループ福祉財団では、
12の出前講座「健康のつどい」を開催しています。

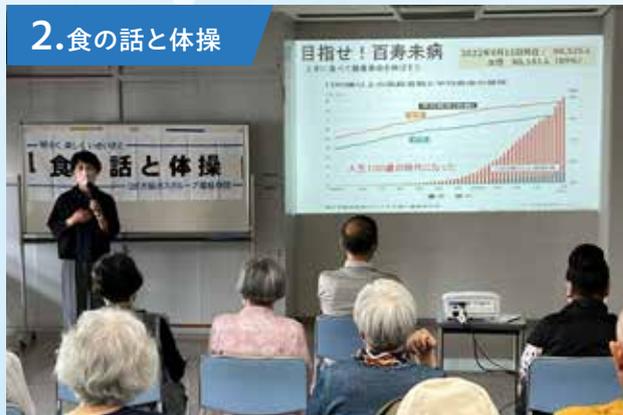
1.健康講話と体操



講師

Daigasグループ健康開発センター 統括産業医 濱田 千雅 先生
Daigasグループ健康開発センター 統括産業医 谷口 有紀 先生
(株)豊川産業医事務所 所長 豊川 彰博 先生
健康運動トレーナー 堀江 利恵 先生

2.食の話と体操



講師

(株)日本食生活指導センター
健康運動トレーナー 堀江 利恵 先生

3.健康リズム体操



講師

リズム体操研究会 河野 三千代 先生 他

4.流行り歌ビクス



講師

Be straight 倉益 弥生 先生 他

5.元気ワクワク健康教室



講師

「K」フィットネス企画/マッサージきむら健公庵 代表 木村 公一 先生

6.まっごうほう 真向法



講師

(公社)真向法協会 会長 吉崎 幸孝 先生



7.いのちの貯蓄体操(日本式氣功養生術)

講師

NPO法人 生命の貯蓄体操普及会 東大阪支部会長 山内 方子 先生



8.骨盤ストレッチ

講師

横田 なおみ 先生



9.ボディートーク

講師

ボディートーク協会 会長 増田 明 先生



10.うた広場

講師

音楽療法グループ「アン・ディ・ムジーク」代表 山田 由紀子 先生



11.笑い与健康体操

講師

落語家 林家 染左さん
健康運動トレーナー 堀江 利恵 先生



12.自然観察会

講師

認定NPO法人シニア自然大学校の皆様